

日本語版幼児用道徳性測度My Childの作成

芝 崎 美 和¹

The Development of the Japanese Version of the Children's Moral Measure MY CHILD

Miwa Shibasaki¹

The purpose of this study was to construct the Japanese version of the children's moral measure MY CHILD which had been developed by Kochanska(1991). In study 1, reliabilities were examined by Cronbach's alpha coefficients and retest technique. 31 items were selected, which were categorized into 2 elements, (1)Affective Discomfort consisting of guilt, concern about relationships with parents, empathy, and apology, and (2)Behavioral Control or Active Moral Regulation/Vigilance consisting of confession, internalized moral conduct, reparation, and concern about others' wrongdoing. In study 2, we measured children's morality with MY CHILD, and the age difference and the sex difference were found on several subscale scores which supported Kochanska(1993). Then, it was concluded that this scale had satisfied reliability.

Key Words : conscience, questionnaire, reliability, children.

目 的

子どもの罪悪感測度はこれまで多く開発されている。その主なものが、自己報告式のシナリオベース測度、半投影式測度、そして質問紙による測度である。対象年齢や目的によってどの測度を用いるかは異なっており、各測度で用いられる手法も様々である。ここではまず、各測度についての概観を述べることにする。

1. 自己報告式シナリオベース測度

子どもの罪悪感測度として最も多く見られるのが自己報告式シナリオベース測度である。Tangney, Wagner, Burggraf, Gramzow, & Fletcher (1991) は、8歳から12歳児を対象とした罪悪感測度、TOSCA-C (Test of Self-Conscious Affect for Children) を開発した。

TOSCA-Cとは、各調査対象児に10のネガティブ課題と5つのポジティブ課題を提示し、罪

悪感や恥、無関心、責任の外在化の程度について5段階評定を求めるものである(例えば、「試験の結果が思ったほど良くありませんでした。家に帰るとお母さんに試験結果を見せなければなりません。」という課題文に対し、1. みんな点数がよくなかったんだよ(無関心)、2. 本当はこんな点数とるはずじゃなかった。私のせいじゃない(責任の外在化)、3. こんな悪い点数をとってしまった私は無価値だ(恥)、4. 先生が言っていることをすべてよく聞いてもっと勉強すべきだった(罪悪感)の4質問に対し、あてはまると思う程度を5段階評定する。)

TOSCA-Cが開発された時期とほぼ同時期に、Burggraf & Tangney (1989) によってSCAAI-C (The Self-Conscious Affect and Attribution Inventory) が開発された。しかし、SCAAI-CはTOSCA-Cに比べ、子どもになじみのない場面を扱うことが多かったため、子どもの罪悪感測度として用いられることは少なく、また、青年

1 新見公立短期大学

用罪悪感測度TOSCA-A (Test of Self-Conscious Affect for Adolescents) も開発されたことから (Tangney, Wagner, Gavlas, & Gramzow, 1991), 子どもから青年にわたる幅広い年齢層を対象とした罪悪感測度としてTOSCAが広く用いられることとなった。TOSCA-Cは開発後, その高い内的整合性が確認されている (Ferguson, Stegge, & Barrett, 1996)。その際, 子どもの罪悪感得点については性差がほとんど見られないことが示され, またTOSCA-CとTOSCA-Aとの相関分析の結果から, 児童期の罪悪感が青年期の罪悪感の予測子となることも明らかとなった。

時期を同じくして, 対象年齢幅を5歳から12歳までに広げた罪悪感測度C-CARS (Child-Child Attribution and Reaction Survey) がStegge & Ferguson (1990) によって開発された。C-CARSはTOSCA-CとSCAAI-Cを基にし, 以下の2点に修正を加えることによってつくられた自己報告式シナリオベースの罪悪感測度である。第1に, TOSCA-CやSCAAI-Cでは, 子どもも青年も一貫して, 恥得点よりも罪悪感得点が高い傾向を示したが, これは罪悪感についての課題に社会的望ましさがより強く反映されているためである。Stegge & Ferguson (1990) はこの問題を解消するためには, 告白や自己懲罰のような, 罪悪感項目を加える必要があると考えた。第2に, TOSCA-CやSCAAI-Cでは, 1つの課題に対して複数の感情の程度を回答しなくてはならない。とりわけ年齢の低い子どもは, 2つ以上の感情を同時に想起することが困難であることから (Harter, 1983; Harter & Whitesell, 1989), 提示された複数の感情のうちどれか1つのみを強く認識した可能性がある。この問題を解消するためには, 各課題につき各々ひとつの反応のみを評定するよう求める必要があると思われた。

そこでC-CARSでは, 4つの道徳違反課題と4つの失敗課題を用意し, 各課題についての質問に対して, 罪悪感の程度, 恥の程度, 責任の外在化の程度を子ども達に5段階評定させ, その理由を回答するよう求めた (例えば, 「ある日, 大好きなテレビ番組を見るために急いで家に帰っていました。その途中, 弟が道の脇で座り込んで泣いているのを目にしました。どうやら道にチョコレートをばらまいてしまったようです。あなたは弟を助けるために立ち止まることなく, ただ家に向かって歩き続けました。」という課題文に対し, 1. あなたは自分を弟を

助けなかった意地悪な子だとどのくらい思いますか? (恥), 2. あなたは悪いことをしたとどのくらい思いますか? (罪悪感), 3. あなたは弟を助けるべきだとどのくらい思いますか (責任の外在化) と質問した後, 4. なぜそう思いますか, と回答理由を尋ねる。)。その結果, 罪悪感を含むいずれの項目に関しても内的整合性は高く, また得点に年齢差や性差が見られないことが確認された。さらに, 構成概念妥当性を検討するために, Zahn-Waxler, Kochanska, Krupnick, & Mayfield (1988) の半投影的測度CIIDC (The Children's Interpretations of Interpersonal Distress and Conflict) との相関分析が行われた。しかし, 2つの罪悪感測度の間に有意な相関は見られなかった。その理由として, C-CARSは, 第1に, 道徳感情が比較的生じやすい場面を扱っていること, 第2に, 加害者の視点からの判断や回答を求めていることが挙げられた。それに対して, CIIDCは曖昧状況を扱っており, 第3者の視点からの判断を求めため, 子ども達が日々遭遇する葛藤や未解消の罪悪感などをより反映するものであり, 子どもが実際に経験する罪悪感をより測定できるという点でC-CARSよりも有用な測度であるといえる。

このように, 自己報告式シナリオベース測度はこれまで多く開発されており, その信頼性や妥当性が確認されてきた。しかし, 自己報告式シナリオベース測度では, 子どもが本当に主人公の視点から判断を行っているかが疑わしいとの見方から, 半投影的課題を用い, 罪悪感など子どもの情動を測定することにより子どもが何を感じているのかをより知ることができるとの主張が見られるようになり, CIIDCをはじめとする半投影的測度に注目が集まるようになった。

2. 半投影的測度

半投影的測度として広く使用されているものがZahn-Waxler et al. (1988) のCIIDCとHoffman (1975) の測度である。

CIIDCは, 3歳から9歳までを対象とした罪悪感測度であり, 曖昧場面についての4つの写真を見せた後, 主人公の感情や行動を質問するものである (例えば, 成人女性が子どもを残したまま部屋を出る写真を見せた後, 「このお母さんはとても怒っています。お母さんはとても怒っているのではありません。部屋から出て行きます, と子どもに話しています。彼女の子どもは

母親の表情や声から怒っていることが分かる、と言っています。」と調査対象児に伝える。続いて、その子が窓から部屋の中をのぞいている写真を見せ、「今、この子は窓のそばを通り過ぎながら、お母さんを見えています。」と調査対象児に伝えた後、1. この子はどんな気持ちでしょうか、2. なぜお母さんは怒っているのでしょうか、3. この子はお母さんを怒らせるようなことをしたのでしょうか、4. この子はお母さんをこんな気持ちにさせることをしてしまったと思っているのでしょうか、5. この子はお母さんの怒りを和らげることを言うことができると思っているのでしょうか、6. あなたのお母さんが怒っているところを想像してみてください。あなたはそのとき何をしようと思えますか、という6つの質問を行う。)。CIIDCで測定された罪悪感には向社会的行動や共感性などとの関連も検討されており、慢性的で解決が難しい罪悪感についての子どもの感情を引きだすことができるため、幼児から児童を対象とした罪悪感研究で広く採用されている。

また、Hoffman (1975) は、小学校5・6年生と中学1年生を対象として2課題から成る半投影的罪悪感測度を開発した。1つ目の課題は、プールの濁りを利用して泳ぐ距離をごまかし優勝するという水泳大会課題である。2つ目の課題は、道に迷った子どもを助けなかったところ子どもが交通事故にあってしまったという迷子課題である。いずれの課題でも、加害者の立場から、1. 内的道徳判断、2. 違反後の罪悪感の程度、3. 違反発覚の恐れ、の各質問に回答するよう調査対象児に求める。Hoffman (1975) の課題は、CIIDCに比べ、対人関係の中で幼児がより遭遇しやすい葛藤場面を扱い、罪悪感の内化の過程に焦点を当てている。Hoffman (1975) は、この測度を用いることによって、罪悪感認識における性差を明らかにした。このHoffman (1975) の測度を改訂したものとして、Thompson & Hoffman (1980) は小学校1・3・5年生を対象とした罪悪感測度を作成した。この研究では、被害者の感情を推測するよう教示された共感性群が、何の教示も受けない統制群に比べ、高い罪悪感得点を示すという結果が得られており、共感性と罪悪感との関係性が明らかにされている。

罪悪感を共感性と関連づけて考えるというThompson & Hoffman (1980) の見解は広く支持され、Kochanska(1991)は、Thompson &

Hoffman (1980) を基にHoffman (1975) の測度のさらなる改訂版を作成している。さらに、Kochanska (1991) は、共感性に基づく罪悪感の発達段階を示し、乳幼児期の罪悪感レベルは、それ以降の社会的行動の重要な予測子となることを明らかにした。

このように、半投影的罪悪感測度は、曖昧状況を用い、かつ主人公の視点からの判断を求めることで、子どもが日々遭遇する葛藤や解決できない罪悪感についてのより直接的な反応を得ることができるため、子どもの罪悪感を測る上できわめて有用な測度であるといえよう。

3. 質問紙測度

自己報告式シナリオベース測度や半投影的罪悪感測度はいずれも幼児や児童を対象としたものである。Kochanska (1991, 1993) は、乳幼児期の愛着研究において、この時期の愛着と道徳性、社会的行動とが密接に関連しているのではないかと予測から、乳幼児期の道徳性測定の必要性を示し、道徳性測度My Childを開発した。My Childは生後21ヶ月から70ヶ月の子どもを対象とした測度であり、100項目で構成されている。Kochanska (1993) は、3つの年齢グループ(21-33ヶ月、34-46ヶ月、47-60ヶ月)の母親にMy Childを実施し、情動的不快感と行動制御/行動的道徳性制御という2つの因子を抽出した。下位項目として、前者には、罪悪感、親との関係への関心、共感性、謝罪が、後者には、違反の告白、内在化された道徳性、補償行動、他者の違反への関心がある。さらに、Kochanska (1993) は、Hoffman (1975) と同様に、道徳性における性差を明らかにし、男児に比べ女児における情動的不快感得点が高いことを示した。

My Childは、対象年齢を低く設定しており、言語発達が不十分である年少児であっても道徳性を十分に測定できること、また、罪悪感を含む感情的側面と、罪悪感を基礎とした補償行動などを含む行動的側面の両方を測定できることから、乳幼児期の道徳性発達や、道徳感情と道徳行動との関連を検討する上で重要な測度であると考えられる。乳幼児期における愛着形成が社会的行動や後の社会性発達に影響するとの考え方は強く、とりわけ道徳行動との強い関連はいくつかの研究で確認されている。幼児や児童と異なり、乳児は自己報告式シナリオベース測度や半投影的測度を用いて言語反応から道徳性を測定することが困難であり、養育者評定の測

Table 1 カテゴリーごとの α 係数, 平均値, 標準偏差, 再テスト法における相関値

カテゴリー	α 係数	<i>M</i>	<i>SD</i>	再テスト法相関
1. 違反後の情動的不快感	.91	3.73	1.02	.76
2. 親と一緒にいる際の良い感情への関心	.75	2.38	1.14	.75
3. 告白	.69	3.22	0.85	.79
4. 謝罪	.74	3.05	0.99	.48
5. 補償行動	.53	3.47	0.89	.40
6. 他者の違反への関心	.94	2.24	1.32	.64
7. 内在化行動	.89	2.92	1.04	.71
8. 共感性	.81	3.42	1.26	.71

度が必要とされるが, 養育者評定による乳幼児期の道徳性測度はあまり開発されていない。

そこで本研究では, 乳幼児期の道徳性測度 My Child (Kochanska, 1991, 1993) の日本語版を作成し, その信頼性を確認する。

研究 1

研究 1 の目的は, 日本語版 My Child を作成し, その信頼性を確認することである。

方法

調査時期 信頼性を確認するための方法の 1 つとして再テスト法を採用したため, 調査は 2 度に分けて行った。1 回目は, 2001 年 5 月中旬から 7 月上旬にかけて, 2 回目は, 1 回目の調査から 2 週間～1 ヶ月半後に実施した。

調査対象者 大学生および大学院生 33 名 (女性 20 名, 男性 13 名) を対象とした。

材料 Kochanska, DeVet, Goldman, Murray, & Putnam (1994) の良心の測度 My Child を用いた。My Child は, 10 カテゴリー, 100 項目から構成されている。10 カテゴリーとは, (1) 違反後に生じる罪の意識のような情動的な不快感, (2) 違反後, 親の側にいることへの関心, (3) 告白, (4) 謝罪, 再犯しないという約束, (5) 補償行動, 懺悔, (6) 他者の違反への関心, 他者の違反の修正, (7) 内在化行動 (自発的な自己修正, 自己規制など), (8) 他者の苦痛に対する, 共感的, 向社会的反応, (9) 遊びの中などでの違反の象徴的再生, (10) 壊れているもの, 違反に関する話などへの反応, であった。

Kochanska et al. (1994) は, 内的整合性の低さと, 再テスト法における相関値の低さを理由に, カテゴリー (9), カテゴリー (10) を除外した 8 カテゴリー, 全 88 項目を分析対象とした。さらに, 8 カテゴリーについて因子分析を行い,

2 因子 (情動的な不快感, 実際の道徳行動) を抽出した。本研究でも Kochanska et al. (1994) に倣い, 良心を情動的な不快感と実際の道徳行動の 2 つの側面から捉えていくことにする。したがって, (9), (10) のカテゴリーを構成する 12 項目を除外し, 2 因子 (情動的な不快感, 実際の道徳行動), 88 項目から成る測度を用いて調査を行うこととした。

手続き My Child について, 原版の意味に沿うよう邦訳を行った。邦訳には, 著者の他, 複数の大学院生が参加した。

回答には回顧法を用い, 回答形式は, 「全く当てはまらない」の 1 から「全く当てはまる」の 5 までの 5 件法とした。調査用紙は個別に配布し, 記入後, 指定の回収ボックスに入れるよう依頼した。

結果と考察

1. 平均値による項目の精選

平均値に著しい偏りが見られる項目は測度の信頼性を低下させるため, 平均値が, 1.5 以下, 4.5 以上である項目を除外した。その結果, 該当する 2 項目が削除された。さらに, 文化差を排除するために, 日本人が経験することがないと考えられる内容を示す項目を回答するよう対象者に求め, 25% 以上の回答者が選択した項目を, 日本の文化に適さない項目であると判断し, 該当する 2 項目を削除した。

2. 再テスト法および内的整合性による項目の精選

測度の信頼性を高くするためには, カテゴリー内の信頼性が高く, かつ再テスト法における相関値が高い必要がある。そこで, カテゴリーごとに Cronbach の α 係数を算出し, α 係数が低い項目と, 再テスト法の結果から 1 回目調査 - 2 回目調査間の相関値が .35 以下の項目 ($p < .10$) を削除したところ, 31 項目が残された。

Table 2 日本版My Childのカテゴリーおよび項目内容

カテゴリー	項目内容
(1) 違反後の情動的不快感	17. してはいけないと言われていることをしているところを見つかったとき、罪の意識を感じたり、後悔したことがある。 22. 自分がした悪いことやいたずらを思い出すと、いやな気分になった。 33. せめられるとあわてふためいた。 80. 何か悪いことをしているのを見つかったとき、恥ずかしく感じるがあった。 88. 人前で間違っことをしたら、あわてふためいた。
(2) 親と一緒にいる際の 良い感情への関心	32. いたずらをして怒られた後、「もう怒っていない？」とたずねることがあった。 42. 何かいたずらをした後、親に「許してくれる？」と聞いていた。 83. 何か悪いことをして親に叱られた後は、親のそばをはなれなくなかった。
(3) 告白	31. 見つかりそうにないときでも、何かいたずらをしたということを親に告白したことがある。 58. 失敗やいたずらを、自分からみとめたことがある。 69. いたずらを告白するとほっとした。 74. いたずらをしてしまったら、いたずらをしたことを親に言わずにいられなかった。 *75. 何かを壊しても、そのことは親にはだまっていた。
(4) 謝罪	8. 何か悪いことをしてしまった後は、自分からごめんなさいと言った。 41. 何か悪いことをした後、もう2度と同じことをしないと、自分から約束した。 51. 謝らないといけな場面では、自分から遊び友だちやきょうだいに「ごめんなさい」と言えた。
(5) 補償行動	62. 何か悪いことをしてしまった後、もう二度と同じことはしないと、何度も親に言った。 72. 何かを壊してしまったとき(たとえば、ものを落としたりして)、かけらを集めたり片づけようとした。 *86. ものをこぼしたり、こわしたりしても平気だった(例えば、「こぼれたけど、そのうち乾くよ」というふうに行った)。
(6) 他者の違反への関心	2. 遊びに来た子が自分の家のきまりを破ると、その子を叱ったことがある。 *37. 家に遊びにきた友だちが、自分の家のきまりを破っても、怒ったり注意したりしなかった。 47. 家に来た人が、自分の家のきまりを破ると怒った。 *82. 友だちが家に遊びに来たとき、自分の家のきまりを守ってもらおうとしなかった(「うちではこれはやっちゃだめ」と言ったりしなかった)。
(7) 内在化行動	6. 言われなくても自分からおもちゃを片づけていた。 *44. 親が見ていないところでは、家のきまりを守らないことがあった。 *54. 片づけられていないものを自分から片づけることはなかった。 59. 家のお手伝いは一生懸命やろうとした。 *78. 退屈なこと(たとえば、部屋を片づけるなど)は、「最後までしなさい。」と言われなければ最後までしなかった。
(8) 共感性	1. 困っている人を、励ましたり元気づけようとしたことがある。 50. 誰かが困っていると、「どうしたの？」とたずねたことがあった。 57. テレビの登場人物を傷つける「悪者」に腹を立てたことがあった。

(*は逆転項目)

各カテゴリーについての α 係数を算出したところ、いずれのカテゴリーにおいても高い信頼性が確認された(Table 1)。カテゴリーおよび項目の詳細はTable 2に示す。

本研究では、Kochanska (1993)、Kochanska et al. (1994)に倣い、乳幼児期の道徳性を情動的な不快感と実際の道徳行動の2側面から捉える。8つのカテゴリーの中で、情動的な不快感を構成するものは、カテゴリー1, 2, 4, 8であり、実際の道徳行動を構成するものは、カテゴリー3, 5, 6, 7である。各因子の α 係数は各々.87,.82と高く、高い信頼性が確認された。

研究1の目的は、日本語版My Childを作成し、信頼性を確認することであった。平均値、再テスト法における相関値、内的整合性の検討によって、各カテゴリーおよび各因子における信頼性を検討した。その結果、合計31項目から成る日本語版My Childが作成され、いずれのカテゴリーおよびいずれの因子においても高い信頼性が確認された。

2歳から5歳児を対象とした研究から、Kochanska (1993)は、情動的な不快感と実際の道徳行動における得点には性差や年齢差が見られることを明らかにしている。そこで研究2では、日本語版My Childを幼児の保護者に実施し、

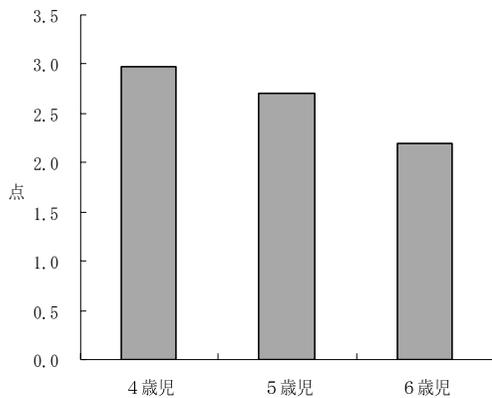


Figure1 年齢による親と一緒にいる際の良い感情への関心得点 (カテゴリー 2) の違い

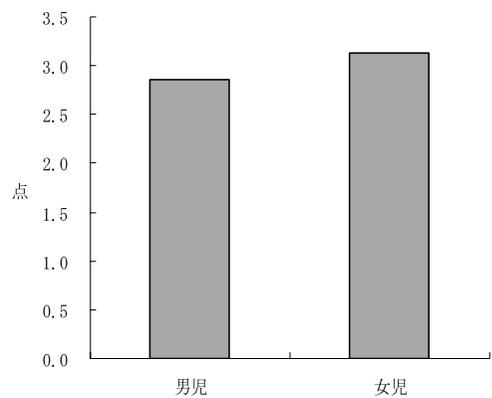


Figure2 性別による内在化行動得点 (カテゴリー 7) の違い

幼児の年齢や性別によって、各カテゴリーおよび因子における得点の高低に違いがみられるか否かを検討する。

研究 2

研究 2 では、日本語版 My Child を用い、幼児の道徳性を測定し、道徳性の高低に年齢や性別による違いがみられるかを検討する。

方 法

調査時期 2001年9月上旬から10月上旬であった。

調査対象者 年少児16名(男児8名, 女児8名), 年中児30名(男児15名, 女児15名), 年長児32名(男児18名, 女児14名)の保護者を対象とした。

手続き 道徳性測定には日本語版 My Child を用いた。回答形式は、「全く当てはまらない」の1から「全く当てはまる」の5までの5件法とした。調査用紙は登園時に幼児の保護者に個別に配布し、記入後、園に設置した回収ボックスに入れるよう依頼した。

Table 3 各タイプに振り分けられる人数の内訳

		LL群	HL群	LH群	HH群
4歳児	男児	1 (6)	4 (25)	1 (6)	2 (13)
	女児	1 (6)	1 (6)	4 (25)	2 (13)
5歳児	男児	2 (7)	5 (17)	4 (13)	4 (13)
	女児	1 (3)	4 (13)	7 (23)	3 (10)
6歳児	男児	1 (3)	4 (13)	7 (22)	6 (19)
	女児	4 (13)	5 (16)	2 (6)	3 (9)

() 内は%

結果と考察

1. 年齢および性別による道徳性得点の違い

日本語版 My Child を用いて測定した道徳性全体得点に、年齢および性別による違いがみられるか否かについて 3 (年齢; 4・5・6歳児) × 2 (性別; 男児・女児) の 2 要因分散分析を行った。その結果、年齢と性別の主効果、交互作用はいずれも有意ではなかった。

2. 年齢および性別の違いによる情動的不快感得点と実際の道徳行動得点の違い

Kochanska et al. (1994) に倣い、カテゴリー 1 (違反後の情動的不快感), カテゴリー 2 (違反後, 親と一緒にいる際の良い感情への関心), カテゴリー 4 (謝罪), カテゴリー 8 (共感性) を情動的不快感因子, カテゴリー 3 (告白), カテゴリー 5 (補償行動), カテゴリー 6 (他者の違反への関心), カテゴリー 7 (内在化行動) を実際の道徳行動因子とし、各因子の得点に、年齢と性別による違いがみられるか否かを検討するために、それぞれ、3 (年齢; 4・5・6歳児) × 2 (性別; 男児・女児) の 2 要因分散分析を行った。分析の結果、情動的不快感因子と実際の道徳行動因子の両方において、年齢と性別による主効果および交互作用はいずれも有意ではなかった。

3. 各カテゴリーにおける年齢および性別による得点の違い

各カテゴリーにおける得点に、年齢や性別による違いがみられるか否かについて 3 (年齢; 4・5・6歳児) × 2 (性別; 男児・女児) の 2 要因分散分析を行った。その結果、カテゴリー 2 に関しては年齢の主効果が有意であり ($F(2, 72) = 3.19, p < .05$), LSD法による多重

比較の結果、カテゴリ-2の得点は6歳児よりも4・5歳児の方が有意に高かった (Figure 1)。また、カテゴリ-7について性別の主効果に有意傾向が見られ ($F(1, 72) = 2.78, p < .10$)、LSD法による多重比較を行ったところ、カテゴリ-7の得点は男児よりも女児の方が高い傾向にあることが分かった (Figure 2)。カテゴリ-1, 3, 4, 5, 6, 8については、年齢、性別の主効果および交互作用はいずれも有意ではなかった。

4. 情動的不快感得点と実際の道徳行動得点による幼児のタイプ分類

最後に、情動的不快感因子と実際の道徳行動因子という道徳性の2側面における得点の高さによって幼児を分類するために、K-means法を用いてクラスター分析を行った結果、4つのクラスター (第1クラスター：情動的不快感低-実際の道徳行動低 (以下LL群)、第2クラスター：情動的不快感高-実際の道徳行動低 (以下HL群)、第3クラスター：情動的不快感低-実際の道徳行動高 (以下LH群)、第4クラスター：情動的不快感高-実際の道徳行動高 (以下HH群)) が得られた (Table 3)。各クラスターに振り分けられた人数は、クラスター1が10人、クラスター2が23人、クラスター3が25人、クラスター4が20人であった。

年齢によって各クラスターに振り分けられる人数に違いがみられるかについて χ^2 検定したところ、各クラスターに振り分けられる人数には年齢による有意な偏りがみられなかった。同様に、性別によって各クラスターに振り分けられる人数が異なるかについて χ^2 検定した結果、性別による人数の偏りは有意ではなかった。

研究2の目的は、My Childによって測定された幼児の道徳性得点の高低に、年齢や性別による違いがみられるかを検討することであった。分析の結果、8つのカテゴリのうち年齢差がみられたのは、カテゴリ-2の、違反後、親と一緒にいる際の良い感情への関心のみであり、さらに性差がみられたのは、カテゴリ-7の内在化行動のみであった。

年齢差については、Kochanska (1993) によって、My Childによる2歳から5歳までの乳幼児の道徳性測定の結果から、情動的不快感と実際の道徳行動という2つの因子のうち、前者の得点に年齢差がみられ、年齢が高い子どもに比べ低い子どもの情動的不快感得点が高いことが明らかにされている。本研究では、情動的不快

感の中でもとりわけ、違反後、親と一緒にいる際の良い感情への関心についてのみ、Kochanska (1993) を支持する結果が得られ、年齢の高い子どもに比べ低い子どもの得点が高かった。2・3歳頃には、罪悪感などの道徳感情は見られるようになるが、違反や葛藤経験の少なさから、違反を償うスキルが十分ではなく、道徳行動はあまり見られない。つまり、違反後、罪悪感や母親のそばから離れたくないなどの情動的不快感とは道徳行動として解消されないまま持続する。しかし、年齢が高くなるにつれ、情動的不快感を行動によって解消することができるようになり、そのため、母親のそばから離れたくないなどの情動的不快感情が低減されるのだと推察される。

一方、性差がみられたのは、実際の道徳行動に含まれる内在化行動においてのみであり、男児よりも女児の得点が高かった。このような結果は、男児よりも女児において内在化された道徳性判断がみられるというHoffman (1975) の見解を支持するものである。Hoffman (1975) は、男児に比べ女児において内在化された道徳性傾向がみられる理由として、躰や社会慣習的性役割の違いを挙げている。すなわち、女児は、主に母親から、他者への共感的反応を生起させるような躰をうけることが多く、他者の感情や要求に応えるなどの表現的役割を誘導的に教示される。他方、男児は、課題の成功や達成のためのスキルを身につけるべきであるという男性的役割を報酬や罰とともに教えられることが多い。このことから、本研究において、道徳性の内在化行動に性差がみられたのは、このような男女による躰や社会慣習的性役割の違いによると推察される。

最後に、情動的不快感因子と実際の道徳行動因子という2つの道徳性因子における得点から幼児の道徳性タイプを分類したところ、4つのタイプが得られたが、各タイプの人数の偏りに統計的な有意差はみられなかった。道徳性の発達レベルには個人差が見られ、個人差を規定するものには社会認知能力や社会的情報処理能力などが挙げられる。つまり、これらの能力がどの程度高まるかにより、どの道徳性タイプに振り分けられるかが異なり、このような社会認知能力に伴う道徳性発達の個人差は、幼児期以降に顕著になると考えられる。

以上の結果から、本研究で得られた結果は、My Childによって乳幼児期の道徳性測定を行っ

たKochanska (1992, 1993), Kochanska et al. (1994) を概ね支持するものであった。したがって、日本語版My Childの信頼性を確認することができた。

総合考察

本研究では、日本語版My Childを作成し、その信頼性が確認された。本研究は、不十分な言語的発達のために、従来の自己報告式シナリオベース測度や半投影的測度では測定が困難であるとされていた乳幼児の道德性を測定することを可能にした点において有意義なものであるといえる。

本研究では以下の3点の問題が課題として残された。第1に、調査対象者の属性についての問題である。研究1では大学生を対象として回顧法を用いた調査を行った。研究1の調査対象者は、他の大学生に比べ、幼児と接する機会が多く、幼児期の記憶を想起しやすい環境にあった。しかしながら、日本語版My Childは本来養育者に実施するものであるため、養育者に実施した場合、本研究で得られたものとは異なる結果が得られたかもしれない。特に、実際の道德行動因子に含まれる項目については、回顧による主観的評価と、養育者による客観的評価との間にずれが生じる可能性がある。この点については今後の検討課題である。

第2に、調査対象年齢の問題である。My Childは生後21ヶ月から70ヶ月の子どもを対象とした測度であり、きわめて低い年齢児の道德性を測定できるという点で、他の質問紙測度と大きく異なる。したがって、研究2において、調査対象年齢を2歳から6歳と設定し、性差および年齢差を検討すべきであった。対象年齢について再度検討するとともに、My Childと半投影的測度(中川・山崎, 2006)との関連を明らかにすることにより、測度の妥当性を高めなければならない。

第3に、道德性タイプと違反時の行動との関連の検討である。My Childで測定された情動的不快感と実際の道德行動による道德性タイプによって、実際の違反時の行動にどのような違いがみられるかを確認することにより、乳幼児期の道德性が社会性発達をどの程度規定するかを明らかにすることができる。

引用文献

Burggraf, S. A., & Tangney, J. P. 1989 *The Self-*

Conscious Affect and Attributions Inventory for Children(SCAAI-C). Bryn Mawr, PA: Bryn Mawr College.

Ferguson, T. J., Stegge, H., & Barrett, K. C. 1996 *My Child-Shame and My Child-Guilt*. Unpublished instrument, Utah State University.

Harter, S. 1983 Children's understanding of multiple emotions: A cognitive-developmental approach. In W. F. Overton(Ed.), *The relationship between social and cognitive development*(pp.147-194). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Harter, S., & Whitesell, N. 1989 Developmental changes in children's emotion concepts. In C. Saarni & P. L. Harris(Eds.), *Children's understanding of emotions*(pp.81-116). New York: Cambridge University Press.

Hoffman, M. L. 1975 Sex differences in moral internalization and values. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 720-729.

Kochanska, G. 1991 Socialization and temperament in the development of guilt and conscience. *Child Development*, **62**, 1379-1392.

Kochanska, G. 1992 *My Child Version 2: A preliminary manual*. Unpublished instrument, University of Iowa, Iowa City, IO.

Kochanska, G. 1993 Early conscience: Organization and developmental transitions. In S. Lamb(Chair), *The beginnings of morality*. Symposium conducted at the biennial meeting of the Society for Research in Child Development, New Orleans, LA.

Kochanska, G., DeVet, K., Goldman, M., Murray, K., & Putnam, S. P. 1994 Maternal reports of conscience development and temperament in young children. *Child Development*, **65**, 852-868.

中川美和・山崎晃 2006 幼児の謝罪と罪悪感発達レベルとの関連, 乳幼児教育学研究, 15, 45-52.

Stegge, H., & Ferguson, T. J. 1990 *Child-Child Attribution and Reaction Survey(C-CARS)*. Unpublished instrument, Utah State University.

Tangney, J. P., Wagner, P. E., Burggraf, S. A., Gramzow, R., & Fletcher, C. 1991 *Children's shame-proneness, but not guilt proneness, is related to emotional and behavioral*

maladjustment. Poster presented at the meeting of the American Psychological Society, Washington, DC.

Tangney, J. P., Wagner, P. E., Gavlas, J., & Gramzow, R. 1991 *The Test of Self-Conscious Affect for Adolescents (TOSCA-A)*. Fairfax, VA: George Mason University.

Thompson, R. A., & Hoffman, M. L. 1980 Empathy and the development of guilt in children. *Developmental Psychology*, **16**, 155-156.

Zahn-Waxler, C., Kochanska, G., Krupnick, J., & Mayfield, A. 1988 *Coding manual for Children's Interpretations of Interpersonal Distress and Conflict*. Laboratory of Developmental Psychology, National Institute of Mental Health.

謝 辞

本研究の実施にあたりご協力いただきました幼稚園の先生方ならびに園児の皆様に心より御礼申し上げます。